企業名：イチネンホールディングス

レポート名：統合報告書 2023

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

イチネンホールディングスは統合報告書の 4 ページにて「いちねんで、いちばんの毎日を。」というスローガンのもとに、社会に貢献できる事業の拡大とお客様から信頼される企業グループを目指していることがわかる。また、1 ページにはグループ一体となって地球温暖化の深刻化や人権問題等に代表される ESG 課題に取り組み、価値向上の成長エンジンとして持続的な成長の実現と社会への貢献を目指している。5 ページのトップメッセージからは海外事業の進展に注力していることがわかる。また、ステークホルダーへの利潤還元も重要視しており、株主を含めたステークホルダーからの期待に応えられるような企業を目指していることも感じ取れる。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

イチネンホールディングスの競争優位性を生み出している要因は複数個ある。まず、5 ページのトップメッセージにあるようにイチネンホールディングスがリース事業、パーキング事業といったストックビジネスを収益基盤としていることから、比較的景気変動に強いことだ。また、一つの事業に執着することなく、M&A 等による事業領域の多角化によってリスク分散が図れ、安定的かつ持続的な成長につながっている。イチネンホールディングスの価値早々の基盤となっているのが、「グループ一体経営」と「チャレンジできる風土」の二つだ。グループ一体経営はイチネンホールディングスが自社の強みとして一番に推し出していることだ。これは多角化経営による環境の変化への柔軟な対応とグループ間のシナジーが核となっており、事業領域の枠にとらわれない経営を行うことで更なる企業規模の拡大に寄与している。失敗を恐れずに新規事業に挑戦できる雰囲気や『先ずはやってみる』という精神も事業拡大に貢献している。複数ある事業の中でもそれぞれ競争優位性が存在している。自動車リース関連産業では限りあるエネルギーの有効活用を考えながら石油の老舗ならではのノウハウで、燃料代と経理事務の削減を実現している。ケミカル事業では商材に合わせて臨機応変に仕入れ先を選定することでコストと製品供給を安定化させている。パーキング事業ではキャッシュレス決済やフラップレス化の導入促進等によって他社との差別化を図り、既存駐車場の売上拡大を狙っている。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

基本的にイチネンホールディングスがもつ競争優位性は持続性のあるものが多いと考えている。ストックビジネスを経営基盤としていることによる景気変動への耐性は経営基盤

が大幅に急激に変化することがあるとは考えられないため持続性があると言える。グループ一体経営は事業数が変化したときにシナジー効果にどのような影響が出るかが問題になってくると思う。新規事業が始まったり、既存事業からイチネンホールディングスが撤退した場合、現在うまくかみ合っているグループ間の横断的なシナジー効果が失われる可能性があるため、一概に持続性が高いとも言えない。チャレンジのしやすい風土は意識次第でいくらでも変わると思うので、持続性はあると言える。自動車リース関連事業、ケミカル事業の競争優位性は持続可能だが、パーキング事業については疑問が残る。競合他社が同様にキャッシュレス決済やフラップレス化を導入した場合、差別化が図れなくなり、その優位性が失われてしまう恐れがある。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

結論から言うと、イチネンホールディングスで自身の人的資本の価値向上を達成することは問題なくできると考えている。イチネンホールディングスは価値創造を支える基盤こそが人財であると考えており、社員一人ひとりの努力と挑戦によって人材価値を高めることがひいてはグループの企業価値を高めることにつながると考えている。社員が自律的に成長していけるように積極的に支援している。具体的にはグループを横断したプロジェクトに社員を参加させることでシナジーを発揮した新規事業・新サービス、多様な働き方やダイバーシティを推進しやすくしている。また、従業員のスキルアップをサポートするために資格取得のための費用を会社側が負担している。従業員の能力開発と次世代リーダーの育成のために階層別の研修体系図を作って研修を行っている。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

私がイチネンホールディングスの統合報告書を読んでまず目が向いたのは徹底したリスク管理だ。金利の変動によるリスクや原油価格変動によるリスク、資金調達に関するリスクなど様々なリスクをリスクの内容とそれに対するリスク管理をまとめた表を用いて分析している。また、リスク管理の報告体制を整備することによってリスクの発生を防止したりリスクを一定の許容範囲内で収める努力をしている。株主を意識した報告書作りを徹底しているのも良い点だ。コーポレートガバナンス体制をシンプルでわかりやすい図で表したり、株主との対話の実施状況を開かれたものにするために、実施時期や対話のテーマを公開するなど、報告書のいたるところに株主に対する配慮がうかがえる。改善の余地がある点としてはデータの掲載の仕方を考えている。主要な財務データや非財務データ、株式情報、社外からの評価、会社情報がただ羅列される形で報告書の最後の方に載せられていたが、報告書に書かれていた事業や成長戦略に関連付ける形で載せることができれば、よりデータを実感しやすくなるのではないかと考えている。

参考文献

イチネンホールディングス統合報告書 2023
https://ssl4.eir-parts.net/doc/9619/ir_material3/209375/00.pdf